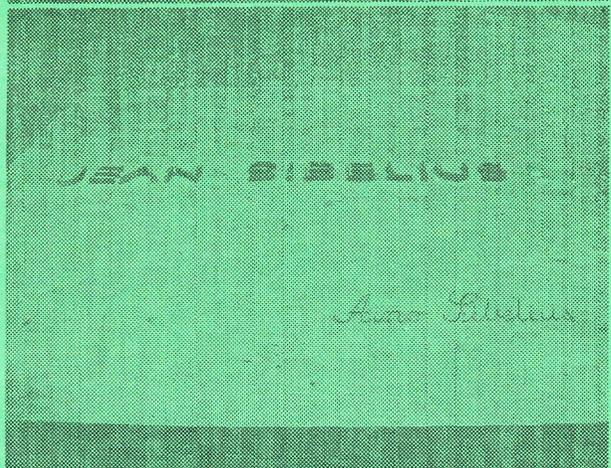


京都 フイルムヅカ 管弦楽団



第貳拾貳回 定期演奏会



ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第22回目となりました。今回の演奏会は指揮者に清水史広氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、本日ここに魅力あふれる交響曲を、披露してくれるものと期待致しております。ところで、作曲家「山田耕筰」と云えば、当時は日本の洋楽黎明期でもありましょうが、日本最初と冠したいくつかの事柄が頭に浮かびます。例えば東京フィルハーモニー管弦楽団を組織し、東京帝国劇場で定期演奏会を開催し、また大編成の交響曲、歌劇に手を染めたのも彼が最初です。彼は「からたちの花」「赤とんぼ」「松島音頭」等、今では和製ポップスの世界では死語になりつつある、「言葉の抑揚とメロディの抑揚が同じ」言文一致の手法で歌う、聴く人の心のひだの奥深くまで染み入る曲を作曲。これを交響曲、歌劇にも採り入れているので大変聴き易く、なつかしい感じの曲になっています。皆様にはその努力の結実を演奏の中にお聴きいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田 之宏

指揮者が持っている楽譜のことをスコアといいます。スコア（総譜）には各パートの譜表が全部出ていて、一目でどの楽器が何を演奏するのがわかるようになっています。英語表現に“know the score”という言い方がありますが、これはもともと競技や試合の得点を知ることから、転じて「今の状況をわかっている」という意味で使われます。

私たちは自分の演奏する楽譜以上にスコアを読み込んでいます。いま誰が何を演奏しているのか、この進行状況で自分が何をすべきかをわかっているつもりです。きょう演奏する曲のなかには複雑に入り組んだスコアのものもありますが、自分たちなりにこれを理解しひとつのメッセージとして聴衆の皆さまにお伝えできれば幸せに思います。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡 武志

 太陽堂グループ

舞鶴 宮津 小浜

事務局：舞鶴市字福来1111の2 TEL：0773（77）2710

京都フィロムジカ管弦楽団

第22回定期演奏会

京都府長岡京記念文化会館

2007年12月24日(月) 午後2時開演

1:15～ ロビーコンサート

🌀 曲目 🌀

山田 耕筰 (1886—1965) / 交響曲へ長調

YAMADA, Kóscak : Sinfonie F dur

I. Moderato - Allegro molto

II. Adagio non tanto e poco marciale

III. Poco vivace

IV. Adagio molto - Molto allegro e trionfante

— 休憩 —

アラム・ハチャトゥリアン (1903—1978) / 組曲『仮面舞踏会』 —レールモントフの劇への音楽より—

Арам ХАЧАТУРЯН : СЮИТА из музыки к драме М.Ю.Лермонтова 《МАСКАРАД》

1. ワルツ

1. Вальс

2. ノクターン

2. Ноктюрн

3. マズルカ

3. Мазурка

4. ロマンس

4. Романс

5. ギャロップ

5. Галоп

ジャン・シベリウス (1865—1957) / 交響曲第7番ハ長調

Jean SIBELIUS : Sinfonia nro7 C-duuri, op.105

指揮 清水 史広

携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。

客席での飲食・喫煙・写真撮影・録音・録画、上演中の私語は固くお断りいたします。

補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。

演奏中の入場は固くお断りいたします。



京都芸術センター制作支援事業

指揮者

清水 史広 (しみず ふみひろ)

相愛大学音楽部卒業。酒井睦雄、尾高忠明、円光寺雅彦の各氏に師事。

オペラ「ヘンゼルとグレーテル」で指揮者としてデビュー。以来コンサートやオペラで幅広く活躍し、京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラアンサンブル金沢、京都フィルハーモニー室内合奏団等を指揮。オペラではモンテヴェルディからブリテンに至るまで数

多くの演目を指揮する。また、1995年から1998年まで文化庁オペラ研修所の講師として後進の育成に携わり、自らもウバルト・ガルディーニ氏の薫陶を受ける。

1996年にウィーン及びザルツブルグでブラームスの交響曲第2番等を指揮した公演は新聞紙上で「絶賛の嵐」と賞され、以来オーストリア、イギリス、ポーランドなどへも活動の幅を広げている。国内ではびわ湖ホールとの関係も深く、「魔笛」「こうもり」「メリー・ウィドー」など同劇場のオペラ公演やコンサートレパートリーを指揮する一方、2002年には定期演奏会にも登場し、ラヴェルの「子供と魔法」等を上演。

2003年には関西の若手奏者達により結成された SINFONIA DOMANI の音楽監督に就任。自ら提唱した「イギリス音楽プロジェクト」は現在も進行中である。また2006年には Jean Le Toise Yokohama の音楽監督に就任し、モーツァルトを集中的に採り上げた同シーズンにおいて、2007年8月に上演された「フィガロの結婚」は各方面から高い評価を受けた。同団においては、ウィンドアンサンブルやストリングアンサンブルを結成するなどユニークな活動も展開し、去る11月に行ったウィンドアンサンブルの第一回公演は瑞々しい演奏で聴衆に温かく迎えられた。

1991年～98年には関西シティフィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を務め、同団の技術的、音楽的成長に多大なる貢献をするなど、プロフェッショナル、アマチュアを問わず、後進の育成にも精力的に取り組んでいる。



曲目解説

山田耕筰／交響曲 へ長調

山田耕筰は日本における西洋音楽の礎を築いた偉大な音楽家である。国内にあつては自らオーケストラを組織して西洋音楽の普及に努め、国外にあつては自作の指揮やショスタコーヴィチをはじめとする作曲家との交際を通じて日本の宣伝マンとしての役割も担った。そうした活躍の一方で、「赤とんぼ」「この道」等々、いまでも多くの人々に愛唱される歌曲を作曲し、人々の生活の中に音楽を染み込ませていった。まさに八面六臂の活躍をした巨人であり、僕たち現代の音楽愛好者にとっての大恩人であると言って良い。

本日演奏する交響曲は、山田がドイツ留学中に作曲した作品である。おそらく、留学で学んだ作曲技法の集大成との思いを込めて作曲したのだろう。このとき山田はまだ20歳代なかば。血気盛んな若者の才気がほとぼしするような澁刺とした作品が生まれた。「日本人が最初に書いた交響曲」と呼ばれるにふさわしい、記念碑的傑作である。伝統的な4楽章構成をとり、全体にベートーベンやシューマンの影響を強く感じさせる。ドイツの古典に学んだ正統派の交響曲といえよう。しかし、作曲された1912年という年代を考えると、このように正統派の作風をとったことに逆に驚かされる。2年前にはストラヴィンスキイの『火の鳥』が上演されており、前年にはロマン派最後の巨人マーラーが死去し、シベリウスが独創的な「第4交響曲」を作曲している。このように、音楽の歴史が未来へと大きく舵を切っていたのにもかかわらず、山田は敢えて古典に範を求めたのである。この若き山田の着実な姿勢が、後の活躍の土台となっていったのだろう。

初演は帰国後に山田自身の指揮でおこなわれた。その際、「かちどきと平和」という表題が付けられたが、これは第1次世界大戦の最中であつたために付けられたものと考えられる。また、この当時「交響曲」という抽象的な音楽を受け入れるだけの素養を持った聴衆が多くいたとも考えにくく、気の利いた題をつけることが必要とされたのであろう。もちろん、作曲の経緯からしてこの表題は鑑賞の助けになるものではない。飽くまでも表題の無い絶対音楽として鑑賞すべき作品である。

第1楽章：悠然とした序奏を経て、心地良い速さを持った主部に至る。いずれも3拍子で書かれている。今でさえ「日本人が苦手な拍子」と言われる3拍子で第1楽章を書いたのは山田の挑戦意欲のなせるわざだろうか。基本的に疾走するような速いテンポを保っているながら、突如として遅い序奏が回想される。この極端なテンポの変化から、大胆不敵で怖いもの知らずな青年作曲家の横顔が見えてくる。

第2楽章：テンポ指定はアダージョだが、「やや行進曲風に」とも指示されており、程よい推進力を持つ。深刻な内面告白としての役割を担うことが多いロマン派の「アダージョ楽章」とは一味違った軽やかな作風である。野山を散策するような風情があり、花鳥風月を愛でる日本人らしさが最も表れた楽章と言えよう。

第3楽章：野生的な迫力を持ったスケルツォ。トリオを2つ持つ5部形式をとる。5部形式のスケルツォはベートーベンにも見られるが、山田は2つのトリオがまったく違う音楽である点で独創的だ。第1トリオが舞曲風なのに対し、第2トリオは瞑想的である。湧き上がる多様な楽想が凝縮された楽章である。

第4楽章：重々しい序奏から始まるが、徐々に力をみなぎらせていき、金管の壮麗なファンファーレによって劇的に明転し、堂々とした主部を迎える。ベートーベンの第5交響曲の劇的な変化を強く意識したのかもしれない。最後はスメタナの『モルダウ』を思わせる、これまた劇的な終結を迎える。

(Tp.遠藤 啓輔)

ハチャトゥリアン／組曲『仮面舞踏会』—M. レールモントフの劇への音楽より—

旧ソ連を代表する作曲家の一人アラム・イリイチ・ハチャトゥリアンはグルジア出身のアルメニア人。彼は、グルジアやアルメニア、さらにはアゼルバイジャンなど西アジア周辺の民謡を良く知っており、その知識が民族色豊かな彼の音楽の源泉となっている。

この組曲『仮面舞踏会』は、19世紀ロシアの夭折の作家ミハイル・ユーリエヴィチ・レールモントフ(1814—1841)の同名の演劇のために書かれた付随音楽から5曲を抜粋したものである。ちなみに、『仮面舞踏会』と題された劇音楽はヴェルディやニールセンらも作曲しているが、いずれも原作が異なる。レールモントフによる『仮面舞踏会』はサンクトペテルブルクの貴族社会を描いたもの。「仮面をつければ、どんな位でも平等になる、仮面には魂も称号もない—肉体があるだけです。仮面で顔の表情が隠れれば、心の仮面を大胆に引きはがすことができますよ。」という主人公の言葉が示すように、仮面舞踏会を舞台に繰り広げられる重々しい心理劇である。主人公は嫉妬深く冷血な賭博師。彼はある夜、仮面舞踏会に参加した妻がそこで浮気をしたのではないかという疑念を持ち、嫉妬心が嵩じて、彼女を殺そうと考える。主人公の殺意が表れているのか、第2曲のノクターン(夜想曲)には殺気が満ちている。しかし、浮気は主人公の勘違いであり、妻は無実であった。後日の舞踏会で妻は歌う。「悲しみが我知らずひと筋の涙となり、君の瞳を走り抜けても、僕の心は痛みはしない。別な男といて不幸な君を見ても、／目に見えぬ虫が目に見えぬように、君の頼るすべない命を食い尽くしていても、僕はうれしい。あれは僕ほどに君を愛せる男ではないのだから。／けれどもしふっと幸せが、君の瞳に輝いて見えたら、そのときは人知れず、悶え苦しむだろう。僕の胸はまるで地獄だ。」このロマンス(歌曲)には、夫が嫉妬深いことを充分理解しており、だからこそ浮気など絶対にしていない、という妻の訴えが込められているのだろう。にもかかわらず、激しい嫉妬心に我を失っていた主人公は、妻が歌うのを途中で制止し、冷酷にも彼女の皿に毒を盛るのであった(第4曲・ロマンス)。

この組曲にはワルツ(第1曲。男女が回りながら踊る舞曲)、マズルカ(第3曲。ポーランドの民族舞踏のひとつ)、ギャロップ(第5曲。颯爽とした舞曲。語源は「馬の駆け足」という3種の舞曲が入っているが、中でもワルツは重要である。レールモントフは登場人物たちにワルツについて次のように語らせている。「新しいワルツは本当にすてき! うっとりとしてびゅんびゅん回ってしまったの。そしたら不思議な憧れみたいなものからかれて、私も、私の思いも思わず遠くに駆けていたわ、胸が締め付けられて。悲しみではないの、うれしさでもなくて。」「生活なんて舞踏会と同じだよ。くるくると回っていれば愉快なものさ、まわりのすべてが明るくって、はっきり見えて… が家に戻ったとたん、しわだらけの衣装を脱ぎ捨てると—何もかも忘れてしまう、ただもう疲れ果てて。」熱狂と、そしてその果てを見据える醒めた視線。この双方を見事に実現したのがハチャトゥリアンのワルツである。そのほかの舞曲も、華やかな響きでいろどられていながら、どこか空疎さを感じさせるのは、レールモントフが描いた上流社会の空疎さを音楽で表現しているからにはほかならない。「あなたの中には、時代そのものが映っているわ、金ピカで、下らない現代がね。生活を充実したいくせに、情熱をしりぞけ、すべてを我が手に納めたいくせに、身をなげうつことを知らない。誇りも魂も無い連中を軽蔑しながら、結局自分がそういう手合のおもちゃにされている。」「(死の間際、鏡を見て)青いわ、死人みたい。でもペテルブルクで青い顔をしていない人間がいるかしら、そうでしょう?」生気を失った人々の白け切った虚無感には空恐ろしささを感じる。この感覚は現代を生きる我々にも理解できるのではないだろうか。 ※引用は岡林菜真訳「仮面舞踏会」『レールモントフ選集 II』1976, 光和堂 による。

シベリウス／交響曲第7番 ハ長調

シベリウス（1865－1957）は生涯に7番までの交響曲を書いた。ベートーヴェンは9曲の交響曲を残したが、彼以降作曲家の交響曲生涯目標は9曲となったという話がある。もしそうなら、シベリウス最後の交響曲が7番、というのはいかにも少ない感じがする。シベリウスがこの曲を書いたのは彼59歳のときだった。92歳という長寿に恵まれながらなぜ交響曲を書くのをやめたのか。それはきょうこの曲を聴いてもらえればわかると思う。

交響曲第7番は演奏時間が22分しかない。しかも単一楽章で編成も小さい。彼が最初に書いたクレルヴェオ交響曲は演奏時間が70分、5楽章にも及ぶ大編成で男声合唱まで加わる。ふつう、作曲家は作品を重ねるごとに規模が大きくなる傾向があるが、シベリウスはまったく逆だ。作品ごとに次第に簡素になってくる。すべての芸術世界に共通する何かをシベリウスは見つけたかもしれない。ものごとの本質を見極めようとするとどんどん無駄が省かれ、簡素なものになって行くようなことだ。交響曲としての結論を出してしまった彼は、もはや次に続くものを書けなくなってしまったのだろう。

0分：ティンパニに続く不気味な上昇音階が低弦に出るが、これが基本動機なので随所に何度も登場する。22分間耳をすませて探してほしい。

1分：まずフルート、クラリネットに柔らかな旋律が現れる。

3分：ビオラを中心とした弦楽器の崇高な演奏が続く。何か祈りたくなる気分。

6分：オーケストラの強奏にトロンボーンの独奏が朗々としている。雄大な感じ。

10分：テンポがだんだん速くなる。スケルツォに相当する部分で、管楽器と弦楽器が交代で小刻みな旋律をやりとりする。

12分：弦楽器が低音で半音階をいったり来たりするところにトロンボーンを初めとした管楽器が相手かまわず重なり合う。おどろおどろしい雰囲気。

14分：急にのどかな音楽になる。この曲で一番なじみやすく聴きやすいところ。平原を疾走する感じ。

18分：閑話休題。さっきのスケルツォ部分が再現される。小刻みな旋律のやりとりは弦楽器のみの刻みとなり、その上にホルンが基本動機を演奏するのをみつけてほしい。

19分：いよいよクライマックス。堂々とした広がりのある旋律のあと、急に混沌とした恐怖の世界に変わる。なにか地球のマグマが吹き出したかのよう。

20分：音楽は勢いを減じ、途切れがちになる。終わりが近い。

21分：1分で登場したテーマがフルートに帰ってきた。神がすぐ近くにまで来ているようだ。この曲で一番好きな部分。

22分：最後は重厚、雄大に結ぶ。

（曲目推薦者 Hrm.長岡 武志）

交響する森の生命

僕たち奈良市民の誇り、河瀬直美監督がカンヌ映画祭で再度受賞した。河瀬監督は、平凡な人々の決して平坦でない人生を温かく見つめ、それら市井の人々の命と命のつながりを一貫して描いてきた。地味ではあるが生命の輝きを確かに感じさせる河瀬監督の作品が世界に認められたことは、映画愛好者としてまことに喜ばしい。前回の受賞作『萌の朱雀』で森を生きる人々を描いて後、『火垂』、『沙羅双樹』と奈良町に舞台に移した河瀬監督が、10年を経て『殞の森』で再び森に帰ってきたことになる。実に感慨深い。

森と町とを舞台にする河瀬監督の姿勢は、シベリウスの言葉「いつも私は、誰でもが森の中か、でなければ、大都会に住むべきである、というように思うのです。」(註1)を想起させる。僕はかつて、この言葉の意味を、「森」と「大都会」はいずれも「人が生命たちと暮らす場所」であり「あらゆる人間がおびたしい生命たちとのつながりによって生きている」ということだと解釈した。そして、シベリウスは、フィンランドの森に住み、森で作曲することで、生命と生命とのつながりを音で描くことに成功したと考えた(註2)。人と人とのつながりを描き続ける河瀬監督の姿勢は、生命と生命のつながりを描き続けたシベリウスの姿勢と重なり合う。しかし、『殞の森』を観て、僕は森にはまた別のつながりがあることに気づいた。それは、死と生のつながりである。

『殞の森』において河瀬監督は新境地を開いたといえる。主人公たちは墓参りのために森に入るが、道に迷い野宿をする。そして、真夜中の森で、「わたしら生きてんねやんなあ？」と自問するようにつぶやく。僕はこの場面で気付いた。主人公たちが今いる「森」とは、生と死の境界が溶けた世界、生と死が矛盾なく共存した世界であるのだ、ということに。実際、僕たちは森を歩いてみると、森は生と死が融合した世界であることを実感できる。たとえば森の土を見てみよう。森の土は、上層はついさっきまで生きていた木の葉である。それらの下層に、木の葉たちが分解されてできた土壌があるのだが、上層の木の葉と下層の土壌との境界はほとんどわからない。どこまでが生でどこからが死か分からないのである。そして、その土壌に根を張って木が生きている。死が作り出した土壌が木の生を支える。これもまた生と死の境界が溶け合っているのである。このように森は累積した死から生を継承する様を端的に見ることができる場所なのだ。河瀬監督はこれまで人と人とのつながりを描いてきたが、『殞の森』において、死から生へのつながりをも描くことに成功したのだ。この映画のクライマックスで、主人公が杉の大木を見上げて涙するシーンはまことに象徴的だ。木の姿は、死が累積して形成された土から生を受け継ぎ、天へとその生を運んでいくものにほかならないからだ。そしてラストシーンでは、主人公の一人は土に頬をうずめ、もう一人は天を仰ぎ見る。これが木の姿の暗喩であるということはもう論を待たない。

こうした「死から生を伝えるもの」としての森の性格はもちろんシベリウスの作品にも描かれている。とりわけ交響曲第7番は、曲全体がひとつの巨大な木のようなものである。模糊としたティンパニのどよめきの中から弦楽器がゆっくりと上昇音型を演奏して始まり、そして曲の最後はヴァイオリンの短い上昇音型によって閉じられる。いわば曲全体が巨大な上昇音型なのであり、模糊とした土壌から伸びて天を目指す大木のようなものである。さらにシベリウスは楽譜にヒントを書き込んでくれた。曲の前半、弦楽器のみで演奏される静かで崇高な楽節に、シベリウスは「*mezza voce* (メツァ・ヴォーチェ)」と指示した。これは用語としては「控えめな声で」という意味であるが、僕はシベリウスが別の言葉を掛けていると確信している。メツァと発音する単語はフィンランド語にもあり、その「*metsä*」の語は「森」を意味するのだ。であるから、このメツァ・ヴォーチェは「森の声」という意味を兼ねていると思われるのである。この弦楽合奏は、穏やかで聴く者を包み込むような優しさに満ちており、あらゆる生命をつなげて瑞々しい空気で包み込む森の優しさを見事に表現している。さらに楽曲の構造から見れば、荒涼とした死の世界を髣髴とさせる冷えびえとした木管の動機と、生命の輝きを讃える賛歌ともいべき雄渾なトロンボーン・ソロをつなぐ役割を負っている。この楽節は、死と生をつなぐものとしての森の姿でもあるのだ。シベリウスのこの曲には、互いにつながりあう生命たちが描き込まれている。森に集う生命たちを、音に置き換えてできた交響曲とも言えよう。そもそも「交響曲 (symphonie)」とは、音 (phone) が一緒になって (syn) できた構築物のことである。その意味でこの曲は、交響曲が行き着いた究極の姿なのかもしれない。

Tp.遠藤 啓輔

(註1) FINLANDIA レーベルのCD『シベリウスの音楽』(ポニーキャニオン D30L5034) 所収ライナーノーツ。大東省三訳

(註2) 遠藤啓輔「「タピオラ」の謎解き」(京都フィロムジカ管弦楽団第9回定期演奏会配布パンフレット所収), 2001

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Kioto

Konserttimestarit

田原 靖子
(Khachaturian, Sibelius)
田村 うらら
(Yamada)

Viulu

相澤 悠
越後 美和
岡島 裕香
小幡 拓也
澤田 菜摘
田原 靖子
田村 うらら
津田 卓郎
西村 浩輔
西村 せり花
水野 紗綾
山口 陽平

Robert L. Latta

飯田 俊也※
大浦 一馬 ※
大八木 文人※
木村 誠志※
久保田 茜※
西村 顕吉※
西邨 奈穂※
前川 信幸※
見渡 あおい※
向井 清史※
森園 博章※

Alttoviulu

田中 邦人
新居 英晃
木下 文恵※
黒澤 優子※
里上 美保子※
高橋 菜与※
富 研一※
野田 薫※
森 静香※
吉川 昌毅※

Sello

小林 豪
多田 進
山崎 敦子
金子 岳史※
高畑 雅至※
綿引 聡史※

Kontrabasso

鎌野 亘
茂原 尚樹
鳥山 拓
山崎 正記

Huulu

江藤 佳美
加藤 勇仁
長尾 友希
吉津 佑紀

Oboe

石原 才子
須貝 絵里
西坂 加奈

Klarinetti

上高原 千寿子
田中 慎一郎
馬屋原 隆広

Fagotti

石塚 有里子
常見 英加

Käyrätorvi

芦原 俊平
片山 真吾
草木 美佐子
坂口 裕志
長尾 諭
長岡 武志
野田 啓
増田 亜由美

Trumpetti

遠藤 啓輔
竹内 恵理
中西 美智子

Pasuuna

益田 繁幸
池田 千紗※
三田 博基※

Tuuba

塚田 淳一

Lyömäsoittimet

一瀬 知史※
佐藤 悠※
新角 耕司※
橘 淳士※

※：客演奏者

顧問

和田 之宏

団長

長岡 武志

事務局長

西村 浩

特別客演トレーナー

金 正奉 (キム ジョンボン)

1998年、大阪音楽大学作曲科卒業。のちに同大学専攻科で1年間指揮の勉強をする。作曲を田中邦彦氏、指揮をウィーン国立音楽大学の湯浅勇治氏をはじめ、金洪才、Ervin Acélの各氏に師事。関西二期会、ザ・カレッジ・オペラハウスの副指揮、エウフォニカ管弦楽団の指揮など、オペラ、管弦楽の両分野で活躍。京都フィロムジカ管弦楽団の第18・19回定期を指揮。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

